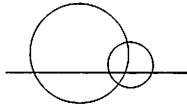


〔諸事項の報告・紹介〕



## 全国大学史協議会（於 熊本大学）に参加して

愛知大学東亜同文書院大学記念センター長 藤田佳久

2010年10月23-24日に熊本大学で開催された全国大学史協議会に参加した。全国大学史協議会は、かつて東日本と西日本の各大学で別々に組織されていたものが一本化したものであるが、かつての経緯もあって東日本部会と西日本部会から構成されている。同じ2010年5月20日には、東日本大学史協議会を愛知大学で開催したことはまだ耳新しいことと思う。本学で東日本大学史協議会を開催するに当っては、同会の本学の会員で研究支援課の山口恵里子氏の力によるところが大きかった。本学の展示施設がほぼ完成したことのお披露目も含め、同氏が同会のリーダー達に愛知大学への誘致をはたらきかけて実現したものである。2009年、国学院大学で開催された全国大学史協議会の会場では、同行した小生は2度にわたり会場でP.R.をし、よい反響を得た。すべて山口氏の下工作のうまさによるものであった。

しかし、秋のこの熊本大会は筆者1人の出席であった。事務局、とくに山口氏はすでに事務局の出張経費がない、との理由であったが、こういう大事な会合にはぜひ事務局からの出席があつて全国の中での大学史の動きも理解し、対応できていくものと思われる。

会場は熊本大学内に設けられたNHK放送大学熊本学習センターのモダンな建物の中の一教室。まず記念講演は、元熊本大学学長で放送大学熊本学習センター所長の崎元達郎氏（専門は工学部土木）により、「熊本大学の歴史財産とユニバーシ

ティ・アイデンティティ」と題して行なわれた。その中で崎元氏は、熊本大学がそれぞれ歴史の異なる工学部、教育学部、法文学部（今は法、文に分離）、医学部により構成されていて伝統性と歴史性が豊かであり、戦後新制大学として統合されても各学部が先行する形をとってきたため、ユニバーシティとしてのまとまりを欠く弱さがあったこと、そのために全学アイデンティティ形成のための戦略として「熊本大学の歴史と学問的伝統性を顕彰、継承して活かしつつ、その延長線上に新しい分野を開拓、発展させる」ことが必要であり、「目標とする方向に沿った人材育成と人事の重要性」から「誇れる大学から憧れる大学を目指す」とし、そのためには大学史資料研究が重要な役割を果たすと位置づけた。そして具体的には、「大学史編纂において、単なる事実の羅列にとどまらず、その時々の人々が何を考えてその史実を起したかの意志を読み解き、記録に残すことだ」と締めくくった。工学部の土木出身ながら、熊本大学の工学部の長い伝統と先をみる眼の確かさに新鮮さを覚えた。

なお、熊本大学ではそのような目標と方向性をふまえた上で、大学の授業では、教養教育の一環として基礎セミナー「熊本大学の歴史」、また学際科目として「五高と日本近代」（担当教員10名）という形で個別的に展開しており、まだ組織的取組みには至っていない、とのことであった。前述の基礎セミナーでは、学生に地元「熊本日々新聞」



に掲載された熊本大学関係記事をそれぞれ1年分探し出させ、熊本大学の時代の中での姿を把握させようとする取組みであったり、キャンパス内の遺構を調べさせ発表させ、それをめぐって議論させるなどの方法が紹介された。いずれも熊本大学への関心を時代史、その時代の中で理解させようとする試みであり、愛知大学でも十分組み合わせ可能のように思えた。

そして、そのあとは各大学から、大学史関連授業の取り組みと方法がシンポジウム形式で発表された。しかし、愛知大学は大学史の授業がなくなってしまっており、直接発言出来なかったことは残念である。

そのような中で、北大は「歴史を教えるのではなく、歴史の中に学生を主人公として位置づける方向」、京大はズバリ「京大史」、神戸女学院大も豊かな歴史をベースに「同女大史」、学習院は「近

代の学習院」、同志社大は「日本の近代化と同志社」、女子美大は「大学史を必修」、などなど多くの発表がつづき、参考になるものが多かった。愛知大学でもぜひ自校史を色々な角度から実践する方法を議論し、実践する面白さを味わうべきだと他大学の試みから痛感した。

翌日は、熊本大学の歴史あるキャンパス内の個々の歴史的建物や五高を中心とした熊本大学史の展示博物館を見学した。大学の研究者の成果や卒業生の活躍などのコーナーは、教員や学生にとっても関心あるコーナーとみえた。愛知大学ではそれを企画（特別展）したが、スペースがなく常設展にまでたどりつけない歯がゆさがある。熊本大学史の展示には、明らかに熊本大学の意志が十分に見る者に伝わってきた。展示の重みと大切さを肌で感じた次第。